

# 市長の伊賀じまん

—銘酒ぞろいの酒処、伊賀—



伊賀市内には現在7つの酒蔵があり、いずれも個性的な日本酒を醸造しています。私は、おいしい料理にはお酒は欠かせないと思っています。伊賀は、古琵琶湖層が育んだ粘土質の土と淀川上流のきれいな水、昼夜の気温差が大きいことなど、糖度の高い良い米ができる条件に恵まれています。良い米ときれいな水で丁寧に醸造され、おいしい伊賀のお酒が造られるのだと言えます。

伊賀で醸造された日本酒が桶買いされ、灘や伏見の酒として販売された時代も長くありました。その後、蔵元の皆さんの努力によって特色のあるおいしい地酒として認知され、全国へ発信できるようになったことは大変嬉しいことです。

伊賀市乾杯条例では、伊賀焼の杯に伊賀酒を注いで乾杯することを推奨しています。ミラノ万博で伊賀酒の試飲を行った際にも、この条例にならって伊



▲市内の7つの酒蔵で醸造された伊賀酒

▶市内の造り酒屋の軒先に吊るされた杉玉（酒林ともいう）。毎年、新酒ができた頃に緑色の杉玉が吊るされます。



賀焼の杯を使用しました。

昨年、京都で行われた日本酒条例サミットでは、大勢の若い女性が会場を訪れ、一緒に若い男性も参加していました。日本酒というと、以前は年配の男性が好んで飲むという印象が強かったのですが、近頃では若い女性の支持を得ているようです。現在、日本酒が市場を占める割合はそれほど高くないと言われていますが、若い消費者が増えることは将来への展望を感じさせてくれます。市内でも女性グループが「伊賀酒 DE 女子会」と称して伊賀酒を楽しむ活動をされており、伊賀酒を後押ししていただいていることをありがたく思っています。

今後も伊賀酒を守り育て、地元の人に親しんでいただきながら、さらに海外進出が本格化するように応援していきたいと思います。

年が明けて一層寒くなるこの時期は、お酒を飲む機会も多いかと思いますが、飲みすぎにはくれぐれもお気をつけください。（伊賀市長 岡本 栄）

## 伊賀市の文化財 95

### 県指定有形文化財（絵画） 三十六歌仙扁額（敢國神社）

敢國神社は伊賀一宮（伊賀国内で最上位に位置づけられた宮）として旧伊賀国の人々の崇敬を集めてきた神社です。この神社に『三十六歌仙扁額』が納められています。

『公室年譜略』の慶長14年（1609）についての文章に「三十六歌仙ノ額 各三十六枚俱二近衛信基公筆 画ハ山徳筆ヲ神献玉フ」とあり、『三十六歌仙扁額』について記載されています。現在は3面1組の計12面になっていますが、本来は36面であったと思われる。

三十六歌仙とは平安時代中期の歌人、藤原公任の「三十六人撰」に載せられた和歌の名人36人の総称です。正月におなじみの百人一首で紹介されている歌人も多く、紀貫之や小野小町などは聞き覚えがあるのではないのでしょうか。

三十六歌仙絵は、歌仙崇拜の風潮と似絵の流行により、鎌倉時代から盛んに制作されるようになりました。これらの多くは、巻子（巻物）形式のものでしたが、室町時代に入ると扁額（横に長い額）に描かれるものが増え、神社に奉納されるようになりしました。人の心のあわれを深くとどめる和歌は、神仏をなぐさめる

意味が込められていると考えられるようです。当時の人々は三十六歌仙の肖像と代表歌を書いた豪華な扁額に祈りを込めて神に捧げました。

和歌を書いたとされる近衛信基とは、本阿弥光悦と松花堂昭乗とともに「寛永の三筆」と称された人物です。絵を描いたとされる「山徳」は、「狩野」山楽の書き誤りとも考えられますが、画風から考えると山楽と考えることは難しく、画家が誰であるのかを特定することができません。

敢國神社に伝わるこの扁額は、桃山時代末期のもので、ひとつも欠損することなく今に伝わっており、文化財として大変貴重なものです。

平成17年3月17日に県指定文化財（絵画）に指定されました。

\* 公室年譜略：藤堂藩主初代から3代までの業績をまとめた史料



▲三十六歌仙扁額（一部）

文化財課

☎ 47・1285

FAX 47・1290

お知らせ

次号の広報いが市は2月1日発行です。1月は合併号のみで、15日号はありませんので、ご注意ください。